

CONTENTS

- 01 **川口光男理事長インタビュー**
会員が皆平等に意見を言う 言いたいことが言える組織に
聞き手 広報委員会 委員長 酒寄映子
- 04 **発会式・記念パーティー報告**
設立準備会イベント・担当主査（当時） 髙谷邦夫
- 06 **発足記念公開セミナー開催報告**
発足記念公開セミナー・担当主査（当時） 細山雅一
- 08 **「国際ユニバーサルデザイン会議2002」を振り返る**
髙谷邦夫
- 10 **Powers of IAUD**
委員会・ワーキンググループ・プロジェクト紹介
- 12 **国内アドバイザー紹介**
- 14 **海外ネットワーク紹介**
専務理事 川原啓嗣
- 15 **広報委員会の今後の取り組み方針**
広報委員会 委員長 酒寄映子



国際ユニバーサルデザイン協議会

「IAUD会報創刊準備号」
2004年3月31日発行

発行：国際ユニバーサルデザイン協議会
発行人：川口光男
編集：広報委員会
編集責任者：酒寄映子
編集委員：木幡明彦、東松道明、中島秀男
編集協力：メディア・デザイン研究所

事務局
神奈川県横浜市青葉区新石川2-13-18-110 〒225-0003
Tel/Fax 045-901-8420 E-mail info@iaud.net

本誌は古紙配合率100%再生紙を使用しています。

IAUD会報
創刊準備号



国際ユニバーサルデザイン協議会
International Association for Universal Design



理事長 川口光男

会員が皆平等に意見を言う 言いたいことが言える組織に

川口光男理事長インタビュー

聞き手 広報委員会 委員長 酒寄映子

国際ユニバーサルデザイン協議会 (IAUD) は、昨年11月28日の発会より4カ月を経た。12月の一般公開セミナーは大盛況のうちに開催され、社会のユニバーサルデザインに対する関心がますます高まっていることを示している。理事長の川口光男氏 (日立製作所) にIAUDの今後の取り組み等についてインタビューした。

動き出したIAUD 7つの委員会、7つの目的

酒寄—— IAUDが発足して4カ月が経ちました。実働の委員会が決定され、活動を始めました。その内容についてお聞かせ下さい。

川口—— IAUD発足以降、ひとつ考えているのは、2004年この1年が勝負だろうということです。現在会員企業は120社を越えました。これは大変大きな所帯であって、参加企業からの期待も大きいわけですね。それだけに、われわれには責任があります。

そのような前提のもとに、今回の委員会やワーキンググループについては理事会社が中心になり、ある程度独

断的に決定させていただきました。本来、IAUD全体が目指す方向の中でそれぞれのメンバーがテーマを考えたり役割分担をするべきではないかと思えます。しかし、今はまだその段階には至っていませんので、余暇とか交通といったキーワードをこちらで設定したわけなのです。

この方向性は、マクロには間違っていないでしょう。IAUDの大きなミッションをかみくだいた運営の単位として、各委員会を決定しました。1—テーマ研究、2—事業開発、3—広報、4—IAUDアワード、5—イベント企画、6—国際、7—情報保障という7つの委員会です。7つの委員会というのは、IAUDが目指す目的を7つに分けたというふうと考えていただければいいと思います。発会式で申し上げたのは、テーマ研究と事業開発と活動成

果の発信の3つでした。これを大目的として、具体化した。ですから、7つの委員会とは、7つの目的をもった各委員会が並列して自主的な活動を行なうわけです。

酒寄——委員会として関心が高いのは？

川口——みなさんが多分、わかりやすく興味があるのはテーマ研究と事業開発ですね。定例研究会というのは、アドバイザースタッフである有識者の方々から、ユニバーサルデザイン(以下UD)に関する知見を会員のみなさんに対して、定期的に提供していくというものです。もうひとつ、各会員企業の事例紹介です。例えば、日立のUDとしては、エレベーターがいちばんわかりやすい例で、これを紹介すると、自分たちでは当たり前だと思っていることでも、他の業種の方から見たら、それがひとつのノウハウとか知恵に転換することがあるんです。

次に、分野ごとにある程度の標準化、プラットフォームを作っていくと思います。企業同士の競争はそのプラットフォームの上でやればいい。例えばボタンの並べ方とか、配置については共通にしておいて、その上で、ボタンの形状や全体のデザインというものを競合設計していけばいいんです。

さらに「UDとは」を研究する「理念研究」があります。「一人ひとり」と言っていたり、「誰もが使える」と言ったり、ちょっとしたところで各社表現が微妙に違う。IAUDで定義して共有していきたいなと思います。

「ユニバーサルデザイン」を定義する

酒寄——UDの定義の統一はなかなか難しいですね。

川口——公開セミナーで会場から「日本のUDIは、海外で作られたものを単純に受け入れているだけだ。そうじゃ



日立製作所デザイン本部にて

なくて、IAUDが目指すのは、あの7つの原則をもっと日本的に直すこと」という意見がありましたね。各社から意見を出して、IAUDのなかで「UDとは」という概念を言えばいいんだと思います。それを日本発のUDとして世界に発信したい。

酒寄——そうした議論が性急にならずに、自由にできることが前提だと思いますが。

川口——そうですね。いまの標準化とかガイドラインについても、完全なものなんてのはないわけだから、第一ステップ、第二ステップという風にどんどん発信すればいいと思う。そうして、一度世に問う。いろいろな意見があればそれを取り入れて修正してまた考えていけばいいんじゃないでしょうか。絶対というのはないんだから、どんどん躊躇せずに、考えるより動くというのが、僕の方針です。

IAUD会員であることのメリットとは

酒寄——まだ委員会に参加していない会員企業もありますね。

川口——ええ、まだほとんど集まっていない委員会もあると聞いています。7つの委員会のどこかに参画していただくことによって、IAUDの活動を知る機会ももてる。

例えばイベントをやるといことは、IAUDのイベント企画委員会が他の6つの委員会と一緒に成果を発信するわけですから、そこに情報が全部集まる。そういう風にとらえて、是非手をあげ参画していただきたいですね。

情報保障委員会は、単に手話や同時通訳をつけるということではなくて、「いかに情報保障していくか」ということをUDとして考えるということが重要です。同様に、広報委員会も活動の成果をいかにわかりやすくUDの視点で伝えていくということを考えなければなりません。それらはノウハウの開発のようなものでもあるわけですね。だから、委員会への参加は、IAUDの活動を知る機会ももてる同時に、1年後、2年後にそこで出た成果が自分の会社に自然に返ってくるということでもあるわけですね。

酒寄——会員になること、この協議会に関わることで得られるメリットはなんでしょうか。

川口——形としては、入会案内に書いてある会員特典の通りなんですけど、もっと定性的な面としては、さまざまなIAUD会員と関われるということでしょうね。IAUDは異業種の団体なので、いままで得られなかった情報が得

られ、知ることもなかった人とのネットワークができるというのも大きいと思います。

酒寄——例えば社内でUDを推進するときに、ここで得た人脈や知識、ノウハウを活用できるということですね。

川口——僕はもう社内で使っていますよ。社内に公開することによって、自分たちの知恵を高めることができると思います。

酒寄——国際会議で得られたもの、ですね。

川口——僕が国際会議で一番良かったと思うのは、展示会なんです。日本のいろいろな企業が、自分たちが考えているUDとされている商品を出した。それに対して海外の方から、日本ってこんなに細かいことに気を配っているの、UDとしてはすごいと言われたんですよ。日本の言葉で言えば、行間にUDが表われているんです。それに外国の方は驚いたんです。

これがIAUD設立へのきっかけになったわけですが、国際とつけたのも、この日本式UDを世界的に発信していこうという思いからなのです。日本式のUDは細かい気配りを生かした世界に誇れる技術なんだという宣言そのものです。

IAUDの組織イメージと活動ビジョン

酒寄——IAUDはどういう組織になっていきますか。

川口——IAUDはまったく新しいタイプの組織です。業種業態を越えた企業が、大小合わせて120社も自主的に集まった団体というのはおそらく日本でははじめてじゃないですか。その分、組織運営の難しさというのはある。でも基本的には任意団体という位置づけなので、枠にしばられずに言いたいことを言い、やりたいことができる組織にしたいですね。

酒寄——言いたいことを言い、やりたいことができる組織に必要なことは？

川口——例えば、僕は情報公開しようよと言っています。自分たちだけで考えているのではなく、なるべく早く会員に意見を求め、世に問うていく。いろいろな意見をもらい、そしてまた考えていくという柔軟さが必要だと思うんです。

会員が皆平等に意見を言う、そういう団体にしていきたいと思っています。

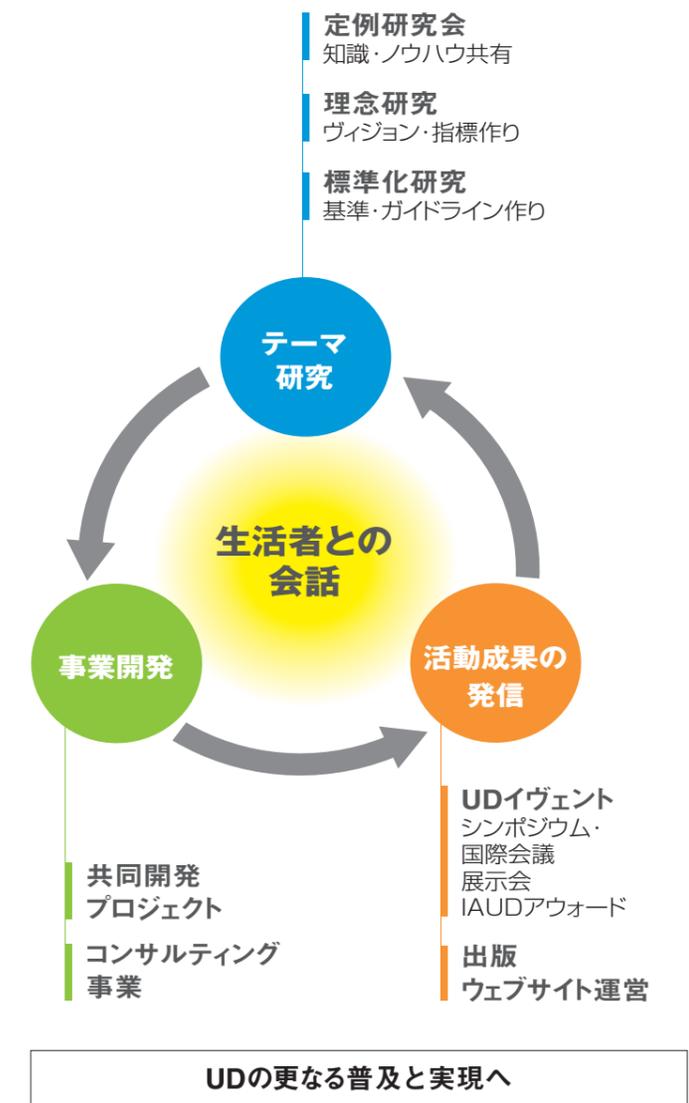
酒寄——IAUDの情報発信とそれに対するご意見を受け取る仕組みが必要ですね。そうして、IAUDという場でUD

の技術が磨かれていく。

川口——僕はUD導入という段階では、技術は概念・理念だと思う。「環境」と同じようにUDが企業理念に入るようにしたいと思うんです。

酒寄——会員企業が理念を共有して、社会を変えていくということですね。

今日は、大所帯であるIAUDが有効に前進していくため、「動きながら会員に問い、世に問う、そしてもう一度考える」という川口理事長の方針をうかがい、改めて会員の皆様の委員会への参画が成功のカギと確信しました。広報委員会の目標もまず、会員相互の目的と課題の共有において頑張っていきます。ありがとうございました。



発会式・ 記念パーティー報告

設立準備会イベント・担当主査(当時)
髙谷邦夫(富士通)

昨年11月28日、IAUDの正式発足にあわせて発会式と記念パーティーが開催された。スケジュール的には綱渡りの連続だったため、会員の皆さまにどこまで満足いただけたか多少の不安も残るが、4カ月を経た今、改めてこのキックオフ・イベントを振り返ってみたい。

スタートに向けて

準備は会場選びから始まった。広さや雰囲気、使い勝手などに加え、アクセスのしやすさ、会場設備のバリアフリー対応なども配慮して絞り込んだ。駅との間の坂道など、条件としては完全とは言えないが、運営で何とかカバーできると考え、セルリアンタワー東急ホテルに決定した。

発会式に先立ち、理事会および評議員会が同ホテル別室で開催された。評議員会は第1回目ということで理事も加えた拡大メンバーで開催された。

発会式

2003年11月28日15時、戸田評議員会議長の開会の辞で発会式はスタートした。

報道関係者57名を含め325名の参加者を迎え、川原事務局長の進行で次第が進められた。戸田評議員会議長から開会の辞、山本会長挨拶、川口理事長の事業計画説明に続き、総裁である寛仁親王殿下からお言葉をいただいた。障害者が健常者と同じようにスキーができる用具の開発など、長きにわたりユニヴァーサルデザイン(以下UD)コンセプトでもの作りを続けてきた事例の紹介は、IAUDの今後の活動を勇気づけ、その方向性を考える契機となるものであった。

最後は川口理事長の発会宣言で発会式を終えた。

記念パーティー

発会式に引き続いて300名を越える参加者で記念パーティーが開催された。中川経済産業大臣、西室日本経団連副会長の両氏を来賓に迎え、会場は熱気に包まれた。両来賓の祝辞では日本の産業の牽引力としてのUDに対する期待と、官民あげて推進してゆく姿勢が述べられ、参加者からはIAUDの方向性に確信を得たという声も聞かれた。また、海外ネットワークとして協力をお願いしているアドバイザー、教育機関、UD団体など12名の方から、IAUDへの期待を込めたお祝いメッセージが紹介された。

会員企業パネル展示・商品展示

記念パーティー会場内では会員企業のUDへの取り組みを紹介するパネル展示と商品展示も行なわれ、参加者に話題を提供するとともに、UDの盛り上がりを実感していただくうえで効果的であった。

34社がパネル展示を、17社が商品展示を行なった。家電製品から女性インナー、紙おむつの面ファスナーまで、ハードウェアからソフトウェアまで、会員各社のヴァリエティーに富んだ、幅の広い取組みを展示することができた。

配布資料について

IAUD発足に合わせ、IAUDの設立趣意、活動ビジョンなどを8ページにまとめたパンフレットを作成し、発会式で参加者の方々に配布した。執筆は総裁、会長、評議員会議長からそれぞれ協議会発足にける想いの言葉をいただいたほか、事業計画ワーキンググループでは活動概要、中期活動計画など、協議会の活動骨子をまとめた。

特に今回のパンフレットでは視覚障害者への配慮として、表紙に総裁のお言葉と事務局の連絡先を点字で入れた。このパンフレットは、今後は内容の充実・改版を継続的に行ない、協議会PRや会員勧誘に活用していく予定である。

緒につく

発会式・記念パーティー開催にあたっては、スケジュールが非常にタイトななか、設立準備会の関係者の皆様をはじめ、多くの皆様のご尽力とご協力により無事終えることができた。ひとまず、この場をお借りして深く感謝申しあげたい。

しかし、協議会の実質的な活動はまだ緒についたばかりである。このイベントを通して確認された協議会の活動ビジョンや各界からの大きな期待、そして発足にかけた熱い想いをあらためて胸に刻み、今後のUDの浸透と実現に向けた活動に取り組んでいきたい。



発会式でお言葉を述べられる寛仁親王殿下



商品展示をご覧になる寛仁親王殿下(左) 記念パーティーでの中川経済産業大臣(中) 西室日本経団連副会長(右)



発足記念 公開セミナー 開催報告

発足記念公開セミナー・担当主査(当時)
細山雅一(松下電器産業)

IAUD設立後初めてのビッグ・イベントとなる「発足記念公開セミナー」が、12月6日、東京銀座の日産自動車株式会社本社新館5階の講堂で開催された。

予想以上の大盛況

わずか2カ月ほどの短い準備期間とWeb中心の告知だけで、どれくらいの受講者が「発足記念公開セミナー」に集まってくれるのか、スタッフは不安でならなかったが、いざフタを開けてみると、約360名の来場者で会場は立ち見が出るほどの大盛況となった。予想を上回る来場者にもかかわらず、会場をお借りした日産自動車の設備担当の方々や、聴覚障害者への情報保障を同時字幕表示システムでサポートしていただいた株式会社ビー・ユー・ジーの技術者の献身的な努力のおかげで、セミナーは大きなトラブルもなくスムーズに進行することができた。

ロジャー・コールマン氏の記念講演

イギリスから招いたロジャー・コールマン氏は、記念講演の中で「欧州でも高齢化は急激に進行している。ハンディキャップを持ちながら自立した生活をしている人の数もそれに比例して増加しているが、モノやサービスが新しい社会に対応していないため、ハンディキャップを持った生活者と社会との間にミスマッチが発生している。われわれはユニヴァーサルデザイン(以下UD)でこの問題を解決しなければならない」としたうえで、「日本は世界一の高齢化社会を迎えており、世界に先駆けて高齢化に対応した新しい社会作りを進めなければ

ならない」とIAUDの活動への期待を述べられた。さらに、電動ドライヴァーや水まき機など、具体的な例を挙げながら、UD商品作りの着眼点をわかりやすく説明していただき、大変参考になる講演となった。

パネルディスカッション

続くパネルディスカッションでは、会員のなかからUDの先進的な取り組みを紹介し、業界や環境を越えた情報の共有化が図られた。特に今回は、メーカーと生活者をつなぐ情報という点に着目して、さまざまな立場からIAUDの活動への課題を提起し、メーカーと生活者の間のギャップも浮き彫りとなった。

また川口理事長もパネリストの一人として登壇し、IAUD発足の経緯や具体的な取り組みを紹介した。川口理事長からは「つねに生活者の視点からの課題発見に努めるための仕組みをまず構築したい」「日本発のUDを世界に向けてタイムリーに発信し、リードしていきたい」などと、IAUDにかける意欲を述べられ、会場からも有意義な意見や感想をいただいた。

別室に設けた会員企業のUD活動を紹介するパネルや商品を展示するコーナーには、休憩時間やセミナー終了後にも多くの受講者が集まり、関心の高さをうかがわせた。

サポートしてくれた方々

今回の公開セミナーでは、サントリー株式会社とネスレ ジャパン グループが飲み物やチョコレートなどを提供してくださったおかげで、360名以上集まった会場の雰囲気も和らぎ、ほっとくつろげる時間を作っていた。また、MCスタンドやパネリストのためのテーブルは、コクヨ株式会社からスタイリッシュで機能的な商品を貸していただき、デザインをテーマにしたセミナーにふさわしいステージを用意できた。会場を提供していただいた日産自動車の「お客様を迎える姿勢」には、とても感動した。来場者に心地よく感じてもらうための細かな配慮を欠かさず、デザイナーらしい仕器の選択や随所に飾られた花など、ここにUDの基本精神を見る思いがした。

余談ではあるが、準備を一緒に進めたスタッフの能力の高さにも感心させられた。緻密な考察と配慮のA女史、汗をかきながら力仕事を厭わないB氏、飄々としながらもIT能力の高いC氏など、素晴らしい人材が集まったものである。これらスタッフや関係者のお力添えで公開セミナーが成功したわけであり、深く感謝申しあげたい。私も心地よい疲労感をいただいた。

この公開セミナーを起爆剤に、ますます活発な議論と積極的な活動でIAUDを盛り立て、日本発のUD社会を築きたいと念じている。

英国王立芸術大学院The Helen Hamlyn Research Centre所長、ロジャー・コールマン教授の記念講演(左)
日産本社講堂での公開セミナー受付風景(下)



パネルディスカッションのパネリスト(左)
会場を埋めるセミナー受講者(中)
会員企業のパネル・商品展示(右)

はじめに

「国際ユニバーサルデザイン会議2002」が2002年11月30日から12月4日まで、パシフィコ横浜で開催された。ユニヴァーサルデザイン（以下UD）をテーマとする国際会議としては日本初で、1998年と2000年に米国で開催された会議に続くものである。

この会議は、米国の国際会議に参加した5名のデザイナーが发起人となり、寛仁親王殿下のお声かけによりスタートした。民間企業、デザイン関連団体に加え、中央省庁・自治体やデザイン・UD関連団体、大学・教育機関の後援、協力も得て、名実ともに産学官をあげたイベントとなった。

会議登録者は、日本を含めた20カ国・地域から693名（海外から87名）、公開シンポジウム参加者が約750名、併設展示会への来場者は約3200名。また、協賛企業29社、賛助企業4社と、米国での国際会議と比較し多くの企業の協力を得たことがこの会議成功の大きなカギであったと言える。

会議の概要

初日の開会式、公開シンポジウムに続き、12月1日から4日間にわたり全体会議、分科会、特別協賛企業によるランチョンセミナー、さらに協賛企業、デザイン関連団体による併設展示会が開催された。閉会式では「国際ユニバーサルデザイン宣言」が発表され5日間のイベントの幕を閉じた。

公開シンポジウム

基調講演はUDの動向と将来展望についてヴァレリー・

フレッチャー氏が米国の状況、ロジャー・コールマン氏がヨーロッパの状況を紹介された。国際会議のため言語の対応に加え、視聴覚障害者への情報保障もこの会議の特徴と言える。（詳しくは後述）

全体会議・分科会

全体会議として、UDを専門とする研究者に加え、幅広い分野で活躍されている方々により7セッションが開催され、取り組み事例の紹介や提案など活発な議論が展開された。

分科会は学術的な研究成果の発表だけでなく、製品開発や取り組み事例、実践結果など100件の論文が32のセッションに分かれて発表された。

併設展示会・ランチョンセミナー

協賛企業、協力団体が中心となり、併設展示会とランチョンセミナーが開催された。展示は合計26ブースで、実際の製品展示やデモンストレーションは、特に海外からの会議参加者から好評であった。

ランチョンセミナーは昼食時に軽食をとっていただきながら聴くセミナーで、特別協賛企業5社により開催された。

情報保障・その他

この会議では基本的に英語が使用されたが、全体会議においては日英同時通訳に加え、日英の同時字幕、磁気ループによる補聴システム、手話通訳など、視聴覚障害を持つ方への配慮がなされていた。特に日英同時字幕については、サービスを提供する会社の所在地が北海道

だったため、ISDN回線で会場音声、文字データのやりとりをするなどITをフルに活用してサービスが提供された。また、同時通訳の質的レベルも非常に高く、欧米のUD専門家からも高い評価をいただいた。

「国際ユニバーサルデザイン宣言」

最終日の閉会式において「国際ユニバーサルデザイン宣言」が発表された。UDを作り手だけの問題として捉えず、むしろ使い手を中心とした考え方として、社会のすべての面に適用されるべきであること、そしてそのための社会の仕組み作りをしてゆこうとする決意を宣言したもので、今後のUD推進の指針となるものである。以下に全文を引用する。

「国際ユニバーサルデザイン宣言」 2002年12月4日 私たちはここ横浜に集い、「人間（ひと）のために一人一人のために」をテーマに議論を重ねてきました。私たちの社会は発展、高度化していく中で効率と引き換えに、知らず知らずのうちに使い手の多様性を軽視してきたのかも知れません。ここで、あらためて使い手と作り手の関係を再構築することが必要です。私たちは一人一人の人間性を尊重した社会環境づくりをユニバーサルデザインと呼び、それを強力に推進していきたいと考えます。

まず、使い手中心のしゅきみを作ることを急がなければなりません。これは単にものづくりにとどまらず、社会のすべての面に適用されるべきだと考えます。私たちはユニバーサルデザインが即座に全ての問題を解決できる魔法の杖だとは考えていません。しかし、時間をかけて目

標に向かっていくことは可能だと思っています。そのためには、使い手が積極的に声を出すこと、そしてそれをきちんと受けとめ、応える社会のしゅきみが必要です。文化・習慣の違いを認め合いながら、真のグローバル化を模索していきます。ユニバーサルデザインの考え方が、限りある地球資源を尊重し、持続可能な社会を築く礎とならなくてはなりません。

私たちは前進します。人間（ひと）がその個性を発揮しながら、いつまでも生き生きと暮らしていける社会を目指します。目標は、すべての人の参画と自立の実現です。世界からここに集まった参加者とその理念を共有し、この会議の成果としてここに宣言いたします。

最後に

UDは超高齢社会となる日本においては、もはや啓蒙・啓発という段階ではなく、実際の製品・サービスとして実現していかなければならない段階にきている。そのためには、産学官のコラボレーションや業界の壁を越えた横断的な取り組みが急務である。本国際会議で改めてその認識を深めたことがIAUD設立につながったと言える。

薦谷邦夫記

■参考資料

- (1) 「国際ユニバーサルデザイン会議2002」プログラム
- (2) 同報告書
- (3) 「国際ユニバーサルデザイン会議2002」公式サイト www.ud2002.org/jp/

「国際ユニバーサルデザイン会議2002」を振り返る

IAUDの設立は時代の流れや生活者の声の高まりという背景もあるが、2002年に開催された国際会議の成功が直接的な契機となった。協議会として本格的な活動をはじめるとあたり、改めてその概要を振り返ってみたい。



「国際ユニバーサルデザイン会議2002」の公開シンポジウム（左）展示会（右）



Powers of IAUD

委員会・ワーキンググループ・プロジェクト紹介

多くの力が結集し、UDの新しい潮流が誕生した。
その活動の課題と04年度の具体的な目標について紹介する。

委員会・WG・PJへのお申し込みについては、IAUD事務局までお願いします。
連絡先
国際ユニヴァーサルデザイン協議会事務局
神奈川県横浜市青葉区新石川2-13-18-110
〒225-0003
Tel/Fax 045-901-8420
E-mail : info@iaud.net

テーマ研究委員会 細山雅一 (松下電器産業)

課題 IAUDの活動の基本となる、「生活者との対話」を具体的に実現するための研究会を機軸に置く。そのなかから、会員の多くが期待している「標準化」の方向・切り口・落とし所を04年度中に見きわめたい。日本から世界に発信する、IAUDらしい、理念についても作りあげたい。

定例研究会WG 櫻田修(東陶機器)

目標 会員の知識、ノウハウ共有を目的に、隔月の研究会を開催する。生活者の視点・標準化の方向・UDの先端情報など、各委員会とも連携し、活動の基礎作りとしたい。

理念研究WG 坂巻裕一(イトーキ)

目標 国内外のアドバイザーや会員との論議のなかから、IAUDらしい日本から世界に向けて発信する理念をまとめあげたい。

標準化研究WG 野村昌敏(日本電気)

目標 UDのさらなる普及に向け、業態の枠を越えたUDの基準・ガイドラインを検討する。04年度は、生活者の視点に立った、標準化項目の洗い出しと落とし所の検討を行なう。

事業開発委員会 後藤義明 (積水ハウス)

課題 「快適で安心な生活」をキーワードに「住、労働、移動、余暇」の視点からプロジェクトを推進。さまざまな業種、業態の力を結集し、会員同士の共同開発やモデル研究を進め、生活者中心の「楽しいUD」の実現を目指す。また、新たなビジネスチャンスを創出していくための事業開発の基盤強化を図り、会員に役立てていきたい。

住空間PJ 宮脇伸歩(INAX)

目標 「家事という切り口でみた生活」「子育てなどライフステージの変化」「家族形態の多様化」等、変わりつつある暮らしのなかでのUDの在り方を追求し、誰もが快適な住空間モデルの創造と提示を目標に活動していきたい。

移動空間PJ 上田太郎(日産自動車)

目標 ますます多様化する移動の際のユーザーニーズを先取りするテーマとして、「UDコックピットデザイン」「移動のためのUD情報デザイン」「公共車両のUDアクセシビリティ」などの研究開発活動をスタートする。

労働環境PJ 西村澄夫(岡村製作所)

目標 「出社から退社まで一連の行為からみたワークプレイス」「高齢者や外国人も共に働きやすいオフィス空間」「身体能力にかかわらず自然に使えるオフィス機器」等をテーマとし、基礎研究から共同開発まで活動を広げる。

余暇のUD PJ 土屋亮介(バイオニア)

目標 映画や音楽鑑賞、スポーツを楽しんだりテーマパークで遊んだり、といったインドア、アウトドアにおける余暇の過ごし方の調査、研究を通して、高齢者、障害者も楽しめるUDを達成するためには何が必要かを探りたい。

広報委員会 酒寄映子(三菱電機)

課題 IAUDの活動成果の発信、協議会の存在価値を高めるための事業を担当する。活動を世の中に知らせる広報活動、一般向けの価値ある出版、啓発と情報提供のためのWebサイトなどを順次、企画していく。一方、会員相互の情報共有、コミュニケーションを活性化するための媒体や仕組みの構築は、04年度の最大の課題である。

会員向け情報サービスWG 木幡明彦(乃村工藝社)

目標 会員相互のコミュニケーションを促し、目的や課題を共有し、活動を活性化するための媒体を続々と立ち上げていく。協議会の各委員会の事業内容など、メールマガジン・会報・会員向けWebサイトなどを組み合わせて、情報を提供したい。

出版企画WG 古田晴子(大日本印刷)

目標 活動成果の発信のひとつの形として、独自企画出版事業を行なう。手はじめに発足記念公開セミナーの記録の出版を企画している。アニュアルレポートや海外のUD関連資料の翻訳等、会員向け出版物も発行していきたい。

Web編集企画WG 加藤正義(富士通)

目標 アクセシブルでUDなWebサイトを運営する。一般向けにUDの啓発・情報発信を行なうとともに、04年度には会員専用サイトをオープンし、会員相互のコミュニケーション・ツールとしてご活用いただきたい。

IAUDアワード 企画委員会 伊藤芳晃(丹青社)

課題 すでに社会的に認知されているグッドデザイン賞との棲み分けを図りながら、アワード事業の自立運営も視野に入れたビジネスモデルを構築する。
目標 IAUDのアワードとしての基本評価基準を策定するとともに、IAUDおよびアワードの理念を広く実社会に生かすために、ワーキンググループを組織してUDの評価認証制度発足に向けた基礎調査を行なう。

イベント 企画委員会 吉武泰子(川島織物)

課題 イベント企画委員会は、成果報告会を主軸にUDの理解と活用(提案)の場の創設と提供を委員会活動の課題とし、生活者起点のUDの開発・提案を目指すIAUD活動の目的に資すべく、会員および各委員会相互、IAUDと生活者のコミュニケーションを図ることを目指し活動する。

第1回成果発表イベントWG 久保行雄(丹青社)

目標 IAUD発足後初の成果発表であり、今後の協議会活動および方向性を定める重要なイベントとして、会員相互はもとより社会的な要請・期待に応える重要なIAUDイベントとして開催することを目標とする。

第2回国際UD会議WG 柘植信(NTTドコモ)

目標 06年第2回国際UD会議開催に向けて、スケジュール策定および会場の選定などに必要な調査・ヒアリングを行わない、実行に向けてのロード・マップ/作業日程案作りを行なう。

国際委員会 小山登(トヨタ自動車)

課題 UDという概念が世界に広まる機運が高まっている今、日本が世界の中で先進的な立場を担っていくべきであり、当協議会の設立趣旨にもあるように日本発のUDを広く世界に発信していくための「場づくり」「人づくり」を基本に、積極的に国際交流のネットワークを形成していきたい。
目標 海外コンサルタントの積極的な活用を推進し、協議会活動の活性化に貢献することをめざす。ブラジルでの国際UD会議への対応やツアーの企画、参加者へのアドバイス等会員の国際活動をサポートしたい。

情報保障委員会 蔦谷邦夫(富士通)

課題 IAUDの関連するイベントにおいて、参加者への平等な情報提供を実現することを委員会活動の中心とする。そのために、利用者の声を積極的に聴き、支援技術の研究、情報保障ノウハウの蓄積、サービス提供を行なう。また、その成果を積極的に広く情報発信し、情報保障の考え方の普及と、実現のための支援活動を推進する。
目標 2002年国際会議の情報保障を参加者の視点から再評価しガイドライン化を進め、04年度成果発表イベント、AE主催国際会議などへのサービス提供、運営支援を行なう。また、06年予定の国際会議への企画に着手する。

WG=ワーキンググループ、PJ=プロジェクト

国内アドヴァイザー紹介

「国際ユニバーサルデザイン会議2002」に引き続き、各分野の専門家の皆様にIAUDの活動へのご助言、ご協力をお願いしていく。



赤瀬達三
株式会社黎デザイン総合計画研究所 代表取締役

日本サインデザイン協会・都市環境デザイン会議・土木学会会員。共著=『インテリア大事典』(彰国社)、『Designing Signs Vol.1公共空間のサイン』(六耀社)、『ひと目でわかるシンボルサイン——標準案内用図記号ガイドブック』(大成出版社)、『コンパクト建築設計資料集成(バリアフリー)』(丸善)、『公共交通機関旅客施設のサインシステムガイドブック』(大成出版社)など。



秋山哲男
東京都立大学大学院教授。都市科学研究科都市科学専攻。

研究活動=交通省の交通ターミナルのガイドラインの委員長、港湾のガイドラインの委員長、道路のガイドラインの委員、ノン・ステップバスの標準化の委員長、タクシーの委員など。地方自治体は交通バリアフリー法の基本構想計画に関して、地方自治体(川崎市・千代田区・八王子市・藤沢市など)その他、道路公団、都市公団など多数のプロジェクトを行なっている。



荒井利春
金沢美術工芸大学デザイン科教授

インダストリアル・デザイナー。自治体や地場産業、企業とともにユニヴァーサルデザイン(以下UD)の実践的な研究を続けている。食器から家具や住宅、まちづくりまで多様な能力のユーザー参加型の研究開発プロジェクトを探究。それらの成果は国際デザインコンペやグッドデザイン賞特別賞等々を受賞している。



池上俊郎
京都市立芸術大学教授。建築家。

1974年大阪大学工学部卒。株式会社アーバンハウス研究所主宰。NPO法人エコデザインネットワーク副理事長。建築を中心に3次元空間造形デザイン活動の実践を「編集」の概念で行なう。東町・江戸町ビル等。「既存都市・近郊自然の循環型再生大阪モデル」研究代表。「東寺教王護国寺ーデジタル空間の透視」研究代表。「宇宙への芸術的アプローチ」研究参加。



太田幸夫
多摩美術大学造形表現学部デザイン学科教授

視覚言語LoCoSを研究開発。「通産省シンボルマーク&CIデザイン制作」「消防庁の全国統一非常口サインデザイン」など、多くのサインを手がける。グラフィック・デザイナー、日本サイン学会会長、NPO法人サインセンター理事長、国際標準化機構(ISO) 図記号専門委員会国内委員。著書=『ピクトグラム(絵文字)デザイン』(柏書房)、『サイン・コミュニケーション』(柏美術出版)など。



岡田明
大阪市立大学大学院生活科学研究科教授

専門=人間工学。主に機器操作時の身体的精神的ストレスやUD等の研究に従事。千葉大学大学院工学研究科修士課程修了後、日本大学医学部、千葉大学工学部を経て現職。医学博士。日本人間工学会・日本生理人類学会・人類動態学会の各理事、ISO・TC159(人間工学)エキスパート。



黒須正明
独立行政法人メディア教育開発センター教授

1978年日立製作所に入社、中央研究所で日本語入力方式やLISPプログラミング支援環境の研究開発に従事。88年同社デザイン研究所に移り、インタラクションデザイン、ユーザビリティ評価の研究に従事。96年に静岡大学情報学部情報科学科教授として赴任し、ユーザー工学の体系化を行なった後、2001年文部科学省メディア教育開発センター教授として赴任し現在に至る。



古瀬敏
静岡文化芸術大学デザイン学部教授

30年以上にわたり、独立行政法人(旧建設省)建築研究所において、建築安全、人間工学といった、利用者の視点からの建築のあり方を研究し、住宅の長寿社会対応設計を実現した。現在は大学院で、高齢社会対応を軸としてUDの実現をめざすべく、次世代の育成に力を注いでいる。



相良二郎
神戸芸術工科大学助教授

研究領域=福祉工学、住環境改善、生活用具、ユーザーインターフェースなど。著書=『老後のマイルーム』(家の光協会)、『福祉機器と適正環境』『介護福祉士のための福祉用具活用論』(以上中央法規)など。略歴=兵庫県立総合リハビリテーションセンター、兵庫県立福祉のまちづくり工学研究所等を経て現職。



清水忠男
千葉大学工学部デザイン工学科教授

クランブルック美術大学院修士課程修了、博士(工学・東京大学)。ザ・バーディック・グループ主任デザイナー、ワシントン大学美術学部助教授を経て、現職。行動環境のあり方に関する研究とデザインの実践を行ない、国内外で多数のデザイン賞を受賞。著書=『ユニバーサルデザイン入門』(ぎょうせい)など多数。



関根千佳
株式会社ユーディット(情報のユニバーサルデザイン研究所)代表取締役

日本IBM SNSセンター課長を経て1998年株式会社ユーディットを設立。アクセシブルなWeb構築やIT機器デザインのコンサルティングを行なう。内閣府、総務省など各省庁と自治体のアクセシビリティ委員。UDNJ(ユニバーサルデザインネットワークジャパン)理事長。美作大・金沢大・國學院大・東京女子大の非常勤講師。著書=『誰でも社会へ』(岩波書店)など。



高橋儀平
東洋大学工学部建築学科教授

1974年重度脳性マヒ者のケア付き住宅建設運動に関わる。80年からは地域の福祉のまちづくり運動に参加。90年代後半からハートビル法、各地の福祉のまちづくり条例、交通バリアフリー法ガイドラインづくりに参画、現在は国や地方公共団体のUD計画に関与。一貫して当事者の視点から生活環境問題を捉えている。



長瀬修
東京大学先端科学技術研究センターバリアフリープロジェクト特任助教授

障害を社会、文化の観点からとらえる障害学(ディスアビリティスタディーズ)を専門としている。青年海外協力隊員(ケニア)、八代英太参議院議員秘書、国連事務局障害者班専門職員を経て現職。著書=『障害学への招待』(石川准との共編・明石書店)など。現在は国連で審議中の障害者の権利条約の研究に力を注いでいる。



中村豊四郎
アール・イー・アイ株式会社 代表取締役

インダストリアル・デザイナー、一級建築士。活動領域はインターフェース・デザインとユーザーの移動環境のマッチング。交通を例にとると、輸送の立場で供給される製品やサービスはたとえ上質でも、個人の移動の観点では供給範囲の境界付近で生じがちな不連続の解決を図ること。モノ・空間・仕組み作りで培った合わせ技でUDを具現したい。



益田文和
東京造形大学教授

インダストリアル・デザイナーとして、家電製品をはじめ、さまざまな工業製品のデザインを手がける。1991年株式会社オープンハウス設立。98年にはエコデザイン研究所を併設。サステナビリティをテーマとしたデザイン開発に取り組む。共編著書=『戦略環境経営 エコデザイン』(ダイヤモンド社)など。



三星昭宏
近畿大学理工学部社会環境工学科教授

研究テーマ=高齢者・障害者交通整備の方法論、交通施設のUD。専門領域=土木計画学、交通計画学、都市工学。略歴=名古屋大学大学院工学研究科、大阪大学助手、近畿大学理工学部土木工学科講師、TRL(英国王立道路・交通研究所)客員研究員など。



山岡俊樹
和歌山大学システム工学部デザイン情報学科教授

専門=人間工学、ユーザーインターフェース、工業デザイン、製品開発、デザイン経営。1971年千葉大学工学部工業意匠学科卒。91年千葉大学自然科学研究科博士課程修了。71年東京芝浦電気株式会社入社。98年より和歌山大学システム工学部デザイン情報学科教授(学術博士)。米国人間工学会、ISO・TC159(人間工学)委員、Universal Access in the Information Society(UAIS) Journalのeditor、他を担当。



山田肇
東洋大学大学院経済学研究科専攻主任・同大学経済学部教授

情報アクセシビリティで、JIS規格「高齢者・障害者等配慮設計指針——情報通信における機器・ソフトウェア・サービス」原案作成委員会委員長、欧州における研究提案評価委員、世界銀行コンサルタント等を歴任。情報社会の経済学を研究。国際大学GLOCOM副所長、文部科学省・科学技術政策研究所客員研究官等を併任。



堀野定雄
神奈川大学工学部経営工学科人間工学研究室助教授

The Helen Hamlyn Research Centre(RCA)と ロジャー・コールマン教授

ロジャー・コールマン教授はロンドンのRoyal College of Art (王立芸術大学院)内に1999年に設置された研究機関、The Helen Hamlyn Research Centreの所長である。同センターはThe Helen Hamlyn財団からの寄付により運営されている。その前身は、やはり同財団の支援のもと、1991年から始まったDesign Ageプログラムである。コールマン教授の指導のもと、高齢化問題にデザインが果たすべき役割を唱え世界的に注目を浴びた。Design Ageとは「年齢のデザイン」と「デザインの時代」とを掛けた言葉である。日本の厚生省が65歳以上を高齢者と定義し、シルヴァー産業の振興を唱えた時期に、彼は、50歳以上の、マーケティングの中心に位置するベビーブーマーをAged(熟年者)と定義した。そして、この裕福で社会的な地位や発言力もあるが、確実に身体的機能の衰えを感じている50代以上の人々のためのデザインこそがキーポイントだと説いた。このコンセプトはその後、英国のみならず、欧州全域に影響力を及ぼし、現在、Design for All、あるいはInclusive Design(包括的デザイン)のスローガンのもと、米国とは少しフェーズの異なるデザイン運動「INCLUDE」として展開されている。

Adaptive Environmentsと ヴァレリー・フレッチャー氏

ヴァレリー・フレッチャー氏は1978年に設立された米国Adaptive Environments(AE)の所長である。AEは障害者や高齢者を支援する非営利団体であるが、日本の同種の団体と異なり、ユニヴァーサルデザイン(以下UD)のコンセプトが形成された1970年代後期の、まさにUD黎明期からUDの普及に主導的役割を果たした。そして、生活環境改善のためには、まずデザイナーや建築家に対して教育を行なうことが先決と考え、デザイナーにヴィジョンを示しながら、協働して問題解決にあたるという戦略をとった。デザインの持つ潜在的パワーにいち早く気づき、この無限の可能性を支援することが、とりもなおさず障害者や高齢者の福祉に繋がる近道と信じたのである。

AEの功績として、特筆すべきは、やはり「UD7原則」で有名なノース・カロライナ州立大学UDセンターと連携して、第1回(1998)と第2回(2000)のUD国際会議「21世紀のためのデザイン」を主催したことであろう。この2つの国際会議を通して、UDを単なる一過性のブームではなく、デザインのメインストリームへと押し上げ、20世紀から21世紀へと続く、まさに世紀を超えた世界的デザイン運動の大きな流れを形成した。そして、その精神は2002年に横浜で開催された「国際ユニバーサルデザイン会議2002」に継承され、さらに、わが国際ユニバーサルデザイン協議会の設立へと繋がったのである。



www.hhrc.rca.ac.uk/



www.adaptenv.org/index.php

海外ネットワーク紹介

専務理事 川原啓嗣

IAUDは、海外でユニバーサルデザインの研究や開発に携わる研究者や教育機関、団体とも密接に連携しながら活動を推進している。

広報委員会の今後の取り組み方針

広報委員会 委員長 酒寄映子(三菱電機)

IAUD広報委員会からの最初の発行物「会報創刊準備号」をお楽しみいただけましたでしょうか？

今号は、実際に動きだしたIAUDを皆様にお伝えしたいと思い、実働の長である川口理事長にIAUDの今後についてインタビューしました。誌面の都合やインタビューアの力量不足で、お話しいただいたことすべてを掲載することはできませんが、理事長の思い、メッセージ、発足までの熱いムーブメントの一端を感じていただけたら幸いです。

発足に係わる各種の報告(発足式とセミナー)、委員会・アドバイザー・海外ネットワークの紹介と、今回は実務的な事項で構成しましたが、2004年度に改めて「会報」=皆様とのコミュニケーション媒体として生み出したいと思っていますので、ご期待下さい。

以下に、IAUD広報委員会の取り組み方針を紹介し、今後へのご要望をいただく材料としたいと思います。

IAUDの活動は、UDの更なる普及と実現へ向けて、生活者との対話を基軸に、

テーマ研究・事業開発・活動成果の発信の3本の柱で取り組んでいきます。広報委員会は、この活動成果の発信を担い、実働ではアワード、イベント、情報保障委員会と協働して活動します。

具体的には、会員向け情報サービスという姿勢から、メールマガジン、会員専用Webサイト、会報など、いろいろな媒体で皆様へ情報をお届けしていく予定です。また、IAUDの各委員会の事業を報告書にまとめたり、国際委員会が翻訳した海外UD資料等の知的財産を、会員が活用できるよう印刷物や電子データにし、お届けしたいと思います。

次に、生活者を含めた協議会外へお伝えしたい内容は、出版、公開Webサイト、ニュースリリース(資料配付)など、こちらも各種媒体でアピールしていく予定です。

IAUD全体を盛り上げ、社会での認知度を上げていけるよう、順次、環境を構築していきますので、皆様も活動に積極的に参加いただき、情報を発信していきましょう。まずは創刊準備号のあとがきも兼ねて。